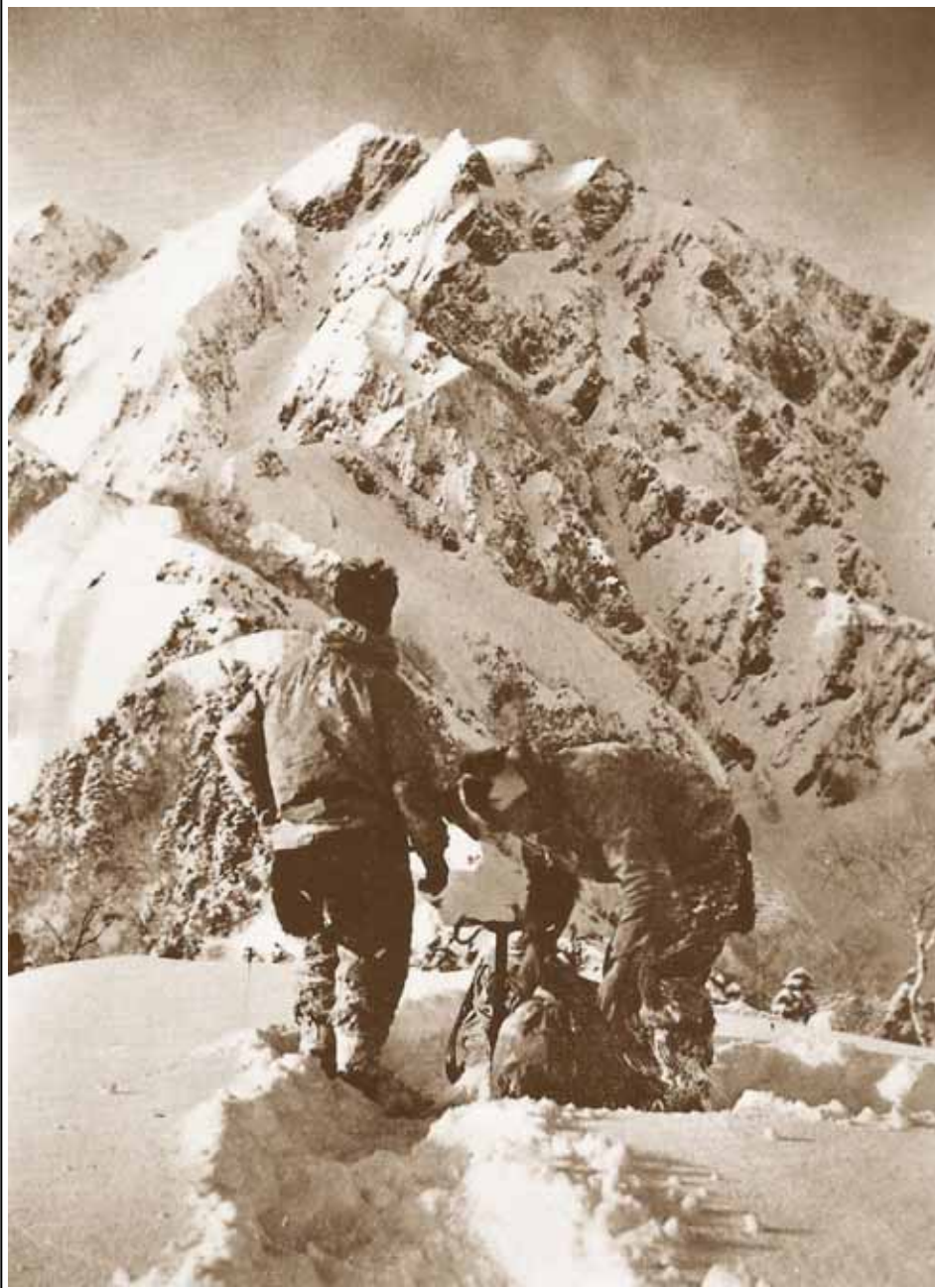


●特集● 一橋山岳部の軌跡



小谷部全助金山行記録所収

針葉樹会報 第119号

目 次

特集 一橋山岳部の軌跡 部史としての山行記録選集	倉知 敬	2
1. 初期10年の珠玉山行記録十選		4
2. 小谷部全助山行譜		23
3. 大戦前後の山行記録		45
4. 半世紀前の一橋山岳部（1960年の積雪期登攀記録）		57
『岳人』記録速報欄より		63
爺岳東北面 1960-61年の積雪期（『岳人』204号より）		66
甘利仁朗・主な登攀記録		71
《コラム》小谷部全助と甘利仁朗 中村 保		76
5. 海外への発信・2つの遠征記録		79
THE AMERICAN ALPINE JOURNAL 1962		85
THE ALPINE JOURNAL 1969		91
編集後記		98

■表紙写真

昭和9年12月26日、鹿島槍東尾根一ノ沢頭における小谷部全助と鷹野雄一（「針葉樹」第8号掲載、小谷部全助撮影を転載）。

8号の写真説明欄には「明日の登攀を助ける為ラッセルに出掛けた際一ノ沢頭より撮したもの。輝く岩壁は時々吹揚る雪煙に芒とすすむ。」とある。

この時は2人のみで登っているの、撮影はセルフタイマーによるものであろう。「針葉樹」に掲載された数多い小谷部さんの写真の中でも、この写真は特に構図が優れ、いかにも登らんとする意気を感じさせる。実際には、この冬期東尾根初見参登行は、悪天で東尾根途中で引き返しているが、一橋山岳部にとって、登攀志向を主眼とした冬期登山の皮切りとなる斬新なものだった。後日、積雪期初登攀する荒沢奥壁北稜も右端に望まれる。

発行日 2010年10月28日

発行者 針葉樹会
(会長 竹中彰)

印刷所 ヤマノ印刷㈱

針葉樹会報
第119号

会報幹事/小島和人、井草長雄
川名真理
連絡先 小島 和人
〒241-0817
横浜市旭区今宿 2-60-1

一橋山岳部の軌跡

—部史としての山行記録選集—

倉 知 敬

東京商科大学から一橋大学に変わっても、一橋山岳部は呼称も変わらず、また連綿としてそれを受け継いできた人々の間には、何かしら共有する気持ちが変わらず伝わって来たように思われる。しかしながらその間、時代は変遷し、登山界も変貌した。特に登山というスポーツなり文化的活動というものは、国内外とも二十世紀の中葉に著しく発展し、頂点を極め、今や衰退なり特殊化なりの変質過程にあると言える。

一橋山岳部も、そういう時勢に従った動向を辿って来たわけで、1920年代の創立からほぼ半世紀に渉る時期の活動は、様々な様相を見せながらも発展的な道筋に沿って行われた一連のもの、と言っていいだろう。それは大局的に見れば、その時だけの一時期を劃した事象であり、再び出現することはない一度だけのものであるように思われる。

一橋山岳部の活動記録は『針葉樹』に纏められ、OBたちの活動は『針葉樹会報』に大略は所収されているので、それらを紐解けば一橋山岳部の人々の足跡を辿ることは出来る。しかしその記述や記録の表現は濃淡も様々、また抜けている部分もある。その創立以来、既に一世紀近く時が経ち、多くの会員が逝ってしまった今、昔のことは忘れ去られ、繋がって来た連環を知る者も少なくなってしまった。ここで、何らかの形で通史的な観点から記録の整理をしておく意義は高いだろう。

歴史の基本は、史実の積み重ねであるから、山行記録という事実に立脚すれば、一橋山岳部の通史を語ることになる。しかし、通史として記録の流れをどう捉えるか。時を追って淡々と記述すればいいとは思えず、時代ごとの立場に相応しい視点からの取り上げ方、重点の置き方や表記の形、があるだろう。では、時代ごとの重点をどこに置くか。それは考える内に自然に、以下のような区切り、テーマの設定、が適切ではないかと思いついたのであるが、以下にその構成に依って一橋山岳部の軌跡を辿ることにしたい。

なお、本稿は、自由な寄稿を根幹とする針葉樹会報に、編者の目から見た主要山行記録の流れを掲載させてもらったという性格のものであり、本会のいわば公式の部史編纂という類のものではない。

執筆に当たっては、焦点を主に登攀史上に連なるような記録に置いたので、本来幅広い登山活動を受け継いできた一橋山岳部の全体から見れば偏った部史を語っていることになる。

その批判は甘んじて受けるしかないが、一方で例えば静観派登山の系譜に主眼を置いた部史があるべきならば、それはまた別に編纂すればよいのではないかと思う。

また、歴史叙述は現代問題への対処のためにあるという意味からは主に若手層の会員を、一橋山岳部の足跡を世に問うという趣旨からは外部の同好の士を、本稿の主な読者として想定して記述した面もあることを付記しておきたい。

1. 初期 10 年の珠玉山行記録十選

この時期は日本の登山界にとって様々な初登が成し遂げられた開拓期だった。それを背景に誕生後の一橋山岳部はどう取り組んでいったか、意義深い記録を選んで、その流れを追いかけた。

2. 小谷部全助^{おやべぜんすけ}山行譜

一橋山岳部が日本登山史に名実共に足跡を記した次の展開は、小谷部全助という人の出現と退去の間に為された。その実践の過程を追うと、山岳部の流れの中で、引き継ぎ、繋がれていったものが、背景にあることがわかる。そういう視点から、この偉大な先輩の生涯の記録を改めて注目したい。

3. 大戦前後の山行記録

時局の影響甚だしく、山岳部の活動は制約されたが、熱意を燃やし逆境に抗した苦勞の山行が続けられた。しかし『針葉樹』記録欄には、その推移が記載されずじまいになっている。ここでは出来るだけ資料を集め、記録欄をまとめた。

4. 半世期前の一橋山岳部（1960年の積雪期登攀記録）

戦後、登山の大衆化とも言うべき趨勢の中で、日本の山に残された積雪期末踏のヴァリエーションルートの追求が大学山岳部で課題とされた。その一橋山岳部としての成果を、対外的に山岳誌に発表した記録がある。その概要を紹介する。

5. 海外への発信・2つの遠征記録

針葉樹会挙げての企画として、2度海外遠征隊を派遣した。その記録がいくつかの海外の文献に記載されているが、その代表的なものを紹介する。



■写真説明

昭和 15 年 3 月 梓川河原より前穂高東壁を望む。(故日江井正巳のアルバムより)

一橋山岳部が日本登山史を飾る活躍をして最も輝いた時期は、昭和 10～14 年（1935～1939）の 5 年間だったと言えよう。その間毎年、北岳バットレス（2 年連続）、鹿島槍荒沢奥壁、前穂高東壁、北穂高谷と、当時先駆的意義をもっていた一連の積雪期登攀を成功させた。表紙写真がその開幕を象徴する一方で、裏表紙写真は閉幕を示唆するが如き感傷をもたらすものだ。

写真は日江井さん撮影で、前景に立つのは船本文治さん(左)と久保孝一郎さんと思われる。この直前の年の暮れ、大塚武・山田亮三コンビが滝谷第 4 尾根を完登、続いて 3 月山田さんが率いて横尾尾根から小槍登攀という合宿を企画したが参加メンバーが充分揃わない。それでも少人数で槍ヶ岳往復は果すのだが、一方で同時期この 3 人は奥又白の池まで往復した。

2 年前の春に東壁を初登し重い凍傷をうけたが、やっと治療回復後の船本さん。初登を狙ってその直前の冬に入山した一人だったが雪崩遭遇で骨折、やはり治癒後の再訪である日江井さん。2 人にとってこれは傷心の山行であり、またこの光景は連続した偉業の蔭に隠れた余韻を漂わせる（日江井さんのアルバムには「最後の冬山」と、写真脇に添書きがある）。

時勢悪化と共にこの後、満足な登山も覚束なくなるのだが、この年は寡雪のせいかわつとした東壁は、もう幕引きだよと、その全貌を誇示するばかりだ。そして、その右手にはやはり黒々と四峰正面壁が岐立して、次の幕開けの舞台を用意しているかのようだ。

